

「マイスター・エックハルト研究—思惟構造のトリアーデ,
esse·creatio·generatio論」

田島照久(早稲田大学商学部教授)

論文概要書

「マイスター・エックハルト研究——思惟構造のトリアーデ, esse・creatio・generatio論」

田島照久(早稲田大学商学部教授)

バリ大学神学部で神学マギステルを取得し、トマス・アキナスと同様、バリ大学神学部教授を二度務め、さらにドミニコ会(Ordo praedicatorum)総長代理として行政的手腕を十分に発揮し、シュトラスブルク、ケルンでは一般信徒の霊的指導者となり、「学の巨匠(Lesemeister)」であるとともに「生の達人(Lebemeister)」として比類ない活躍をしたマイスター・エックハルト(1260年? - 1328年?)がその晩年、ケルン大司教ハインリッヒ・フォン・ヴィルネブルクによって異端告発され、その死の翌年ヨネハス二十三世の教書「主の耕地にて(In agro dominico)」により異端の断罪を受け歴史の表舞台から一切の痕跡を抹消されてすでに660年余を経ている。それにもかかわらず、エックハルトの精神的遺産は弟子のヨハネス・タウラー、ハインリッヒ・ゾイゼをへてドイツ・ミュスティクという一大潮流を形成し、タウラーからはマルティン・ルターが多くを学び、また一方、15世紀のニコラウス・クザーヌスは、秘かに伝写されたラテン語写本資料を収集し、みずからも深くエックハルトに学んでいる。故国ドイツでは、ヤーコブ・ベーメがその精神的遺産を引き継ぎ、パラケルスス、ヴァレンティン・ヴァイゲルを経て展開した自然神秘主義の流れを完成させたといわれる。またエックハルトの精神的遺産を受け継いだダニエル・フォン・チエブコと、同じシレジア地方のミュスティカー、フランケンベルクに強く影響されて詩作を始めたヨハン・シェフラーはアンゲルス・シレジウスと称し、エックハルトのドイツ語説教の言葉を髣髴とさせる二行詩を数多く残している。

エックハルトから発したドイツ・ミュスティクの流れは、ドイツ・イデアリスムスのフィヒテ、シェリングに影響を与え、またヘーゲル、ショーペンハウアー、ニーチェなどもエックハルトに深い関心を寄せていたことが知られている。特にフランツ・フォン・バーダーはエックハルトの思想的再発見に中心的役割を果たし、ハイデッガーも「Gelassenheit」というエックハルト

トの根本語を語り継いでいる。20世紀の異色の思想家ルドルフ・シェタイナーもエックハルトの思惟の独自性に注目したし、マルティン・ブーバーもその著書『人間の問題』の中でエックハルトの強い影響下にあった時期を回想している。他の領域においては、例えば社会心理学者エーリッヒ・フロムも自由の問題をエックハルトから深く学びとったことを告白しているし、C.G.ユングにいたっては、エックハルトを「自由な精神の木に咲く最もうるわしき花」とまで称えている。

異端断罪から660年余の間、秘かに伝写されたエックハルトの思想は以上概観しただけでも西欧思想の土に明らかに生きつづけて来、今日に至っているといえる。

現代の研究者の間ではその二人の弟子、タウラーとゾイゼと共に「ドイツ・ミュステイクの三つ星(Dreigestirn)」(マルティン・グラープマン)と称され、特にその透徹した洞察力のゆえに「ドイツ・ミュステイクの眼」と呼ばれてきたマイスター・エックハルトの思想とはいったい何であったのか、膨大に残された写本群に託された救済論的メッセージとは何であったのか、エックハルトの思惟の全体的眺望から明らかにされねばならない。

本論文ではこれまでの研究では取り上げられることが少なかったエックハルトの思惟の構造に着目し、この構造解釈をエックハルトの思惟の全体的眺望を獲得しうる最も有効な解釈地平と理解した上で、そこから個々の問題領域、個別テーマへと踏み込むというコンセプトを基本シェーマとしている。

まずエックハルトの独自の思惟構造を、「esse·creatio·generatioトリアーデ構造」としてとらえる。

esseをめぐる思惟、すなわち存在論と、creatioをめぐる思惟、すなわち創造論と、generatioをめぐる思惟、すなわち誕生論とがエックハルトの思惟の個別的な展開において相互参差し、相即関連し、問題互換の動的関係において統合されているという理解である。

トリアーデ(三重)構造とは、静的(statisch)な三層構造からなるという理解ではなく、動的(dynamisch)連関において、つまり三重にたたみこまれることによって、主張の立処が常に互換されうる。一種のゆらぎを有しているという意味である。

そしてこのような動的なトリアーデ構造に即して見ると、エックハルトの思惟展開における特異な方法論といったものが浮び上がってくる。

この特異な方法論を「パースペクティヴ変換(Perspektivenwechsel)」とクルト・ルーに従って名づけることにしたい。観点を転換して思惟を展開することは、そのこと自体少しも特異な方法論などではない。しかしながらエックハルトにあつては、このパースペクティヴ変換が何の前置きもなく、論理的必然性もその限りにおいては認められぬままに突如として、頻繁に駆使されてくる。パースペクティヴ変換はそれまで積み上げてきた論理的整合性による理解の基本的地平をことなげに破壊しきる。例えば、エックハルト研究において、最もアクチュアルな問題として議論されてきたもののひとつとして、神をesseとしてエックハルトはとらえていたのか、あるいはintelligereとしてとらえていたのかといった問題がある。

無論エックハルトはあるときはesseは神である、つまり神とesseの同一を説き、またあるときは、神をintelligereとして説いている。しかし問題とされるのは、『前期バリ討論集』第1問題で展開されている、論旨の展開の中で述べられたesseの否定にある。この第1問題は「神においてesseとintelligere

とは同一であるか」という問をめぐるものであり、論旨は、神においてはesse(在ること)とintelligere(知性認識すること)とは同一であるという論証を遂行していくことが冒頭で明確にされているのであるが、途中で突如として、創造者にして非被造的である神は、intellectusでありintelligereであつて、ensでもesseでもないとされ、神の内にはいかなるensもなくまたesseもない、と結論づけられていく。

この箇所解釈にあたつては、例えば、ボエナー＝ジルソンのように、正反対の二つの命題の対立を弁証法的にとらえ、esseについての否定的規定が神の絶対的超越を表わし肯定的規定が神の被造物への最内在を表わしているという理解や、ロスキーのように二つの動的局面とみて、否定性を上昇的弁証法、肯定性を下降的弁証法と理解する解釈や、グラーブマン、コブルストン、アルベルトなどのように、時期的に主張が変わつたという理解など多岐にわたっている。例えば、クルト・ルーは、神がintelligereであり、神においてはいかなるesseも否定するという『バリ討論集』の主張から、のちに「ベギン会」などの靈性に触れて、いわば伝統的な「神はesseである」という主張へと変わつたとする見方をとっている。

この問題などは、「パースペクティヴ変換」というシェーマにのつとれば、その観点の切り換え、捌きといったエックハルトの側のいわばコンセプトが

はつきりと跡づけできることとなる。ジルソンやロスキーの語る動的弁証法というようなあいまいなとらえ方ではなく、その局面、その局面の切り換えの思考的枢軸が明瞭に見えてくるのである。その観点転換の遂行の跡を「序論, iv) パースペクティヴ変換」において追ってみた。

さらにこの問題の詳細な扱いは「本論 I esse(有)をめぐる思惟 ii) 『パリ討論集』におけるエッセ 理解, 4) 神におけるエッセと知性認識との同一(第 I 問題)」において行っている。

さて、それではなぜエックハルトはパースペクティヴ変換を多用するのであろうか、という問が当然立てられてくるであろう。

この問は、エックハルトの聖書義解の方法への問いという新たな問題領域を拓くことになる。すなわちパースペクティヴ変換という方法論は、エックハルトにおける Hermeneutik と不可分に結びついているのである。

この Hermeneutik はエックハルトの言葉を借りれば、「あなたが核(kernen)を手にしたと思うならば、あなたは殻(schalen)を砕かなければならない」という言葉にその本質が端的に語られている。

人間言語(聖書記者の記述)という外殻の内に宿る核子(神の言)を取り出す「義解」はそれゆえ外殻の破碎という一種の言語破壊を伴う。その言語破壊は *sensus parabolicus* (譬喩的意味) を露にすることであり、聖書記者の記述は *sensus parabolicus* を包蔵した *sensus literalis* (文字上の意味) の提示であるというオリゲネス以来の伝統的理解にエックハルトも従がっている。聖書の「記者」は福音史家達であるが、聖書の「著者」は神であるという理解である。

すなわち聖書は神のひとつの言であってすべての部分には、全体が語り出されている、という理解がパースペクティヴ変換のひとつの根拠となる。

と同時に「説教者の兄弟会(Ordo praedicatorum, ドミニコ会)に所属するエックハルトにあつて、義解の遂行される現場のうち最も重要な場は説教の現場である。言語の外殻の破碎は、いわば転調の落差にも似て、精神の覚醒への機縁となるという「Lebemeister」の宗教的実存の問題との関連も無視できないであろう。

いづれにせよ「序論 iii) 聖書義解と解釈学(Hermeneutik)」においては、エックハルトの聖書理解を中心に、そこから採られた方法論、特に「哲学者たちが自然的なものとそれらの属性について書いている事柄」が聖書の内で書

かれていることと「共鳴」しているというエックハルトの主張が扱われている。

エックハルトの思惟には、「パースペクティヴ変換」といった動的な構造様式とともに、異なるテーマ領域において共通して用いられているようないわば静的な構造図式といったものが確認される。その中のひとつとして、

序論 ii) では「Exemplarismus: 範型と範例」をとり上げて検討を加える。

Exemplarismus(範型論)とは一般にはプラトンのイデア論について語られる構造であるが、ここではExemplar(範型) - Imago(似像), Urbild(原像) - Abbild(写像), という関係構造において二つの対象をとらえていくという思惟の枠組をいう。

エックハルトにおいてはこのExemplarismusの思惟枠組は、①神の内なる言——神の外なる言, としてcreatio論に導入されていると同時に②イエス・キリスト——魂, としてgeneratio論にも導入されている。

①は神の内に永遠にとどまる万物のイデアとしての神の内なる言と, それを範型として語り出された神の外なる言, すなわち被造物であり, ここからはロゴスによる創造論が展開されていく。②は, エックハルトの救済論の中心をなす「魂の内における神の誕生」を支える基本構造をなすものである。

ここでは歴史的イエスの誕生は, すべての人間にとっての救済論的「範例 exemplar」であって, 一切の人間に救済の可能性を根拠づける「先例」として, ②の「魂の内における神の誕生」を成就するための「先例」としてとらえられていくのである。

「序論」では以上のようなエックハルトの思惟全体にかかわる諸構造, あるいは方法論の他に, エックハルト・ミュステイクのコアを成す確信を i) 内絶と通底という展望からとらえることが試みられる。「神は神の全神性をたずさえて魂の根底にいる」。これがエックハルトの全思索を貫く確信であって, いわば全思惟の発動する始点であるといえる。ドイツ語で語られたgrunt (根底, 根拠) という語は, ラテン語で語られるprincipium(始原)とかcausa (原因) という語, すなわちスコラ学の用語とは異質なあるニュアンスを伝えている。gruntはgotes grunt, grunt der sêleというミュステイク固有の用語で語られてるが, 魂の根底に(in dem grunde der sêle)神がその全神性をたずさえている, とは魂自身が無限の深さを宿しているということであり, その深さは神に通底するものとして, 内なる超越すなわち内絶である。「序

論」の冒頭においてまずこのエックハルトの全思索プロセスの原点を確認した上で、この根底においてesse・creatio・generatioのトリアーデ構造が語られているのをわれわれはドイツ語著作の内で確認するのである。

このあと、先に触れた仕方ではii) Exemplarismus：範型と範例、iii) 聖書義解と解釈学(Hermeneutik)、iv) パースペクティヴ変換、について全般的な説明がなされる。

序論で以上のようなエックハルト理解の大まかな展望が得られたあと、本論においてエックハルトの思惟がI～VIにわたって論究される。

本論の構成はトリアーデ構造に従って大きく三つに分かれる。

すなわち、Iではesseをめぐる思惟、が扱われる。エックハルトの存在論理解の基本テキストとなるものは、『三部作』として構想されていたもののうち現存するラテン語資料中、『三部作への全般的序文』、『バリ討論集』、『出エジプト記註解』、『創世記註解』が主なるものであるが、この他にドイツ語による説教、ラテン語による説教等も用いられる。

さて、i)『三部作への全般的序文』におけるエッセ理解、においてはまず中世スコラ学における叙述方式に触れ、『命題論集』、『問題論集』、『註解集』の成立史的考察を行ない、特に大学における「定題討論」について形式やその実施方法などについての概観を提示する。エックハルトの『三部作』も『バリ討論集』もすべて当時のこういった様式に従っているからである。そのあと、1)で『三部作』の構成に触れ、その膨大な著作がいかなる意図の下で構想されたかを探る。

2)『三部作』理解の前提と展望、ではまずエックハルトの用いる「普遍的名辞(terminus generalis)」、例えばesse, unitas(一性), veritas(真), sapientia(知恵), bonitas(善)などは、個有的存在者の様態や性質に従って理解してはならない、というエックハルト自身の前提的事項について確認をした上で、esseの第一義的用語として、エックハルトも、esseがこの世界に存在する有限な個物の第一原因(causa prima)として、また普遍的原因(causa universali)として、トマスに従い「ipsum esse(エッセそのもの)」と理解していることを確認する。

さらに、より先なるもの(priora)とより上位にあるもの(superiora)はより後なるもの(posteriora)から全く何も受け取ることがないだけでなく、そのうちにあるいかなるものによつて働きかけられることもない、という命題

の解釈と分析を通じて、この原因である上位のものから結果である下位のものへの不可逆な形而上学的優位に基づく方位性がノイブラトンの豊かな豊かさの横溢という思惟と共通することを示し、この命題が、神のエッセと被造物のエッセとをcreatio論で論ずる場合の主導的パースペクティヴである *causa essentialis Theorie*(本質的原因論)を語るものであることを指摘する。

さらにterminus generalis(普遍的名辞)すべてに共通であると語られている7項目のテーゼについて、特にesseに関する観点より解釈をほどこし、そこからエックハルトのエッセ理解に必要な種々の前提と多様なパースペクティヴとを導びき出す。

以上の準備作業を終えてのち、『三部作への全般的序文』の内で『命題論集』の第一命題として予定されている「エッセは神である」というテーゼの「範例的論証」をテキストとしてエックハルトのエッセ理解を分析、解釈、検討を加える。

この『命題論集』第一命題を基礎として『問題論集』第一問題が立てられることになるが、これも現存しているのは『全般的序文』の内で範例的に展開されているものに限られているので、この範例的解答をテキストにして分析、解釈、検討を加えていく。この解答の論証は、「帰謬法」あるいは中世の用語を用いれば、*destructio consequentis*(帰結の破壊)によっている。

第一命題で「エッセは神である」ことが同様に帰謬法で論証され、さらに第一命題に基づいて第一問題が定立され「神は在るか」に対する答、「神は在る」が帰謬法で論証され、さらにこれらを基礎として、『註解集』の第一註解「初めに(始原において)、神は天地を創造した」という『創世記』の冒頭のアウクトリタスが義解されていくのである。この義解の分析、解釈、検討は、iv)『創世記註解』におけるエッセ理解、の冒頭で行われる。

さて、つぎに本論Ⅰ, ii)では『バリ耐論集』におけるエッセ理解が検討される。ここでの論究の主題は、序論でも触れた、神におけるesseの否認の問題である。まず、テキストの論旨展開に、いかなる仕方で神におけるesseが否認されているのかを跡づけしたあとで、のちにフランチェスコ会総長となった神学者ゴンザルヴスとの「意志と知性の優位」をめぐる討論の記録を資料として、両者の主張を分析し、特にゴンザルヴスに対してなされたエックハルトの異論を受けて、これに反駁を加わえているゴンザルヴスの反論を分析する。そこから神におけるエッセ否認の可能な観点を "*modus significandi*

表示の様態”として導き出し、「神はesseではない」という否認のバースベクティヴを明確にすることによつて、同時に第二のバースベクティヴ導入によつて、すなわち“ad rem significatam表示された事物に従う”という観点から、神におけるesseの是認が帰結されることをバースベクティヴ変換ということから導き出すことを試みる。

そしてこのような解釈地平を踏まえた上で「第1問題」の論証の論旨を追つて、そこに隠されている本来のテーマ、すなわち「創造論」を明らかにしようとするものである。

iii)『出エジプト記註解』におけるエッセの理解、ではキリスト教の神観をギリシャ哲学の有の思惟に結びつけるという中世哲学の試みの典拠となつた聖句「わたしは有つて有る者Ego sum qui sum.」に関するエックハルトの義解を追うことによつて、いわば伝統的な神とエッセの同一の立場を様々な観点より分析することが試みられる。

特に2)再帰的反復語法:sum qui sumの義解では、反復語法(reduplicatio)の有する自己自身への折りたたみの意味を、ロスキーやリベラの解釈するように三・一神論の「聖霊による父と子の交流」という再帰的キネシスにとらず、すなわちこの場合の再帰的反復語法は、「聖霊の場」を表わすのではなく、「御言の場」を表わすことをテキストに沿いながら主張する。

さらに、3)と4)ではトマスの存在論を受け継ぐエックハルトのエッセとエッセンチアの理解を明確にすることによつて、エックハルトの定立した「第一命題、エッセは神である」というテーゼに基づくエッセ理解を整合的に跡づけることを試みる。

「I esse⁽¹⁾をめぐる思惟」の最後として、iv)『創世記註解』におけるエッセ理解、を取り扱う。

このテキスト領域においては、「duplex esse(二重のエッセ)」と「principium (始原)」という問題が主題的に扱われる。

duplex esseに関しては、エックハルトは、いかなる被造物も二重のエッセを持っている、と被造物にエッセの二重構造をみる。第一のエッセとは、根源的原因の内にある一なるもの(unum)、神の言の内の一なるものであつて、それは堅固な、確固たるエッセ(esse firmerst stabile)であり、潜在的エッセ(esse virtuale)とも語られる。もうひとつのエッセとは、事物が固有の形相の内では有する、つまりは形相に規定されたエッセ(形相的エッセ, esse

formale)であつて、無力で変わりやすい(infirmum et variabile)エッセとされる。

被造物の本質(essentia)に限定された有限なエッセと重ねてその被造物のidea的原形としての神の内の一なるesse, esse ipsumが同時に観られているというところに、先に扱った神におけるエッセの是認と否認のアボリアに対する解が存するといえる。すなわちduplex esseに基づくバースベクティヴ変換が遂行されているからである。

このduplex esseについて注意を要することは、被造物が別々な二つのエッセesse virtuale(潜在的エッセ)とesse formale(形相的エッセ)とを有するというのではなく、一なるもの(unum)をその根源的原因の内にある様態として見たとき、それはesse virtuale(潜在的エッセ)と呼ばれ、その根源的原因より造られた結果という様態に即して見たとき、それはesse formale(形相的エッセ)と呼ばれるのであつて、ひとつのもの(unum)の様態(modus)の違いに即して語られているのがduplex esse論であるとされなければならない、ということである。

そしてさらに重要なことは、被造物のエッセを神のエッセの内に、すなわち神のエッセと直截結びつけて見るというエックハルトの思惟の視線である。

ここからは、本論における中心的論究テーマである「神と被造物のエッセをめぐるアナлогия論」への通路が拓かれるからである。

duplex esse論ではこのあと、anima(魂)の内と外におけるエッセの二重構造の問題を扱ったあと、『創世記註解』で論じられているもうひとつの主題、「始原principium論」について取り扱う。

エックハルトは『創世記』冒頭の「初めに(in principio)」という語は『ヨハネ福音書』の冒頭の「初めに(in principio)」という同じ言葉と照応し合っていると理解し、天地創造がロゴスによる創造であることを語り、

「始原(principium)」とは①イデア的理念ratio idealisおよび事物のイデアratio rerumであり、②知性intellectusであり、③永遠の今nunc aeternitatis

であるとする。それゆえに「始原において創造した」とは、③より永遠の今における創造であり、「継続的創造creatio continua」としてとらえられていることが確認される。

そしてこの神が天と地とを創造した(creare)その始原とは、その内で神が永遠に在り(esse)、そしてその内で神的ベルソナの流出が永遠にあり

(generare), あつたし、またあるであろう全く同一の今である、と語られ、ここにesse・creatio・generatioのトリアーデ構造が明される。そしてそのトリアーデ構造が、永遠の第一の単一なる今(primum nunc simplex aeternitatis)

というエックハルトの独自の表現によつて語られる。神が今なる永遠において在るということは、エックハルトに従えば、神が瞬間において万物を創造し、瞬間においてその独り子を生むということと別なことではなく、「神のエッセ」が「瞬間における反復」という契機によつて語られていることのうちに、エックハルトの「存在論」と「神論」との独自の結びつきをみて取ることができるのである。

「本論 I ^(内) esseをめぐる思惟」においてエックハルトの「存在論」がその様々なテキスト・レヴェルで分析、解釈、検討されたが、そこでは例えば、被造物のduplex esse(二重のエッセ)という理解を引くならば、ひとつ(unum)の神のエッセが様態の違いによつて、無限なる、つまりエッセンチアに限定されることのない、神の内なるエッセと、エッセンチアに限定された被造的エッセの二重構造として理解されていたが、さらにこの問題をつきつめていったところに、神と被造物のエッセをめぐるアナロジア論の地平が現出してくる。

「II 神と被造物のエッセをめぐるアナロジア論」では、まずそもそもアナロジアという思考が成立してくる理拠について、特に中世キリスト教神学、すなわちスコラ学の問題領域の内では考察を試みる。

絶対超越者を人間言語で語ることができるであろうか、という神学成立のための根本的問は、「否定神学」という人間言語による神への肯定的述語づけの不可と断念とを表明する、一種の不在告知という方法論を創出した。

否定言辭による神への述語づけは人間言語の自己否定を媒介にして遂行される神の不在証明(アリビー)といえる。ブソイド・ディオニシウス・アレオパギタによつてキリスト教会へと持ち込まれた否定神学は、しかしながら人間言語による「神学」の成立不可能を結果的には物語るものである。

神に対して、肯定言辭で語ることが、何らかの意味において基礎づけられなくては神学は構築できないといわざるをえない。

そこでいわば「否定神学克服」という観点より、同じドミニコ会士であつたトマス・アキナスの解釈を検討することによつて、そこからアナロジア論への進路を見い出し、アナロジア思考の基本的論理構造と、その本質的意

味とを探っていく。

その際、アナロジアの類型として古来分類されてきた三つのタイプ、1) 不等性の類比、2) 帰属の類比、3) 比例性の類比、のそれぞれの類比構造を、その類比例とともに細かく検討を加え、特に現代に至るまでアクチュアルな論議を展開してきている、神を語る言語はいかなるアナロジアの構造のもとで理解されるべきであるかという問題に対して、modus significandi(表示の様態)とres significata(表示されたもの)という観点から、比例性の類比と帰属の類比の定位をそれぞれ図り、また両者の限界づけを試みる。

以上のようなアナロジア論全般にわたる検討をひと通り遂行したあとで、それらから得た解釈の地平より、エックハルトの「神と被造物のエッセをめぐるアナロジア論」の解釈へと進んでいく。

エックハルトが神と被造物のエッセをどのようにとらえたかを探るための基本テキストとなるのが『集会の書に関する説教と講義』であるが、このテキスト箇所には、文献上極めて困難な問題が潜んでいる。

すなわち、神と被造物のエッセを理解するためのアナロジアの基本構造がまず明確に示され、「ひとつの同じものの様態と先後の違いに基づくアナロジア」というのちのルネッサンス期神学者スアレスの分類に従えば、「内的帰属の類比(analogia attributionis intrinseca)」に相当するものであることが明らかにされるが、問題は、この内的帰属の類比を説明するのに外的帰属の類比の類比例である「健康例」が用いられているというところに存する。

テキストの論旨展開上から見れば、整合していても、そこで語られている論理的内容の上からは明らかに不整合であるといった事態に当面するからである。またこれとは逆に、論旨の展開上犠牲にされていた論理的整合性がつぎの展開ではいきなり回復され、こんどは論旨の展開上、著しい齟齬がそこに露呈されるにいたるといった事態にも直面するのである。

この矛盾に満ちた謎のようなテキストをどのような仕方で理解していくか、解釈という作業の間われるテキスト群であるといえる。

まず、内的帰属の類比、外的帰属の類比という名称においては類似した二つの類比の論理構造の明確な違いを確認したあと、エックハルトの用いた健康例に従って、神と被造物のエッセとを説明した場合にいかなることがそこに帰結されるかを検討する。そこから導きを出されるのは、「被造物は無である」という帰結である。この帰結をエックハルト自身の叙述や思惟に照ら

し合わせた上で、エックハルトの意図でもなく、さらに存在論上も是認しえないことを確認したあと、それではなぜエックハルトは「健康例」という全く別の構造のアナロジアの類比例をもって神と被造物のエッセを語ろうとしたのであるか、というエックハルトの意図の解釈へと進むのである。

そして他のテキスト箇所⁽²⁾の解釈等を通じてたどりついたのは、アリストテレスの語ったこの「健康例」のうちの「尿」という類比項が生体に対して有する関係性、すなわち「徴す、表示する」という関係性がエックハルトのアナロジアにとっては不可欠なモメントであったという結論である。

この「表示」という性格は、エッセの問題においては動的な依存性に置き換えられ、被造物が神を表示するとは被造物の全存在が、その都度その都度、神のエッセを求め向っているという本質的事態を語るものと理解する。被造物の神に対する絶対依存性がここには語り出されているのである。エックハルトは被造物のエッセは被造物自身の所有に帰さない神帰属のエッセであり、神は一瞬一瞬、くりかえし被造物に対してエッセを貸し渡すことによって、全世界をその都度創造し在らしめ支えている、という極めてtheozentlischな存在論を構想していたことが明らかとなるのである。このコンセプトに従って、特にドイツ語でくりかえし語られ、また異端審問の際断罪された言説、「すべての被造物、それはひとつの純然たる無である」という被造物の無の教説も理解されなくてはならない。つまり、一切の被造物は一瞬一瞬、神より神帰属のエッセを借り受けることで存在しえていて、そのエッセはけっして被造物の所有に帰さない。現に存在している被造物そのエッセが神所有のエッセであれば、被造物に帰属するものは無いことになる。エッセンチアはエッセの限定性でありエッセンチアのみで存在するということとはありえないからである。

ここからは、常にはたらいっている、生ける神、世界の一切を「永遠の第一の単一なる今」において、一瞬一瞬創造し続ける(継続的創造の)神というエックハルトの神観がはつきりと見えてくるのである。しかもこの「永遠の第一の単一なる今」は、神があり(esse)しかも神のベルソナの発出(generatio)、神の子の誕生がなされるトリアーデの場である。

「Ⅲ creatio⁽³⁾をめぐる思惟」では、トリアーデの第二creatio(創造)が、ロゴスによる創造という観点、すなわち神の知性認識のはたらきから語られているエックハルトの思惟を主題的に扱う。

まず、神と知性認識との同一を説くエックハルトの主張を確認したあとで、イムバッハの分析する、エッセに対して知性認識が有する優位、すなわち、①神学上の優位、②因果的優位、③認識論的優位、④霊的優位、を批判的に検討したあと、これらの優位観点は、エックハルトの内で固定された視座となっているのではなく、知性認識をエッセに対して優位に置くとき採られるパースペクティヴであることを結論づける。

iv)において、creatioをめぐる思惟の中心的問題点が取り扱われる。エックハルトの語る三種の言葉についての叙述から、神の内なる言、外なる言というロゴスによる創造論を追ったあと、creatioを「御言の受肉」という観点で包摂されていく思惟構造を取り出し、その御言の受肉の場は、「永遠の第一の単一なる今」とされていることをここでも再確認する。さらにcreatioとgeneratioとが御言の受肉の内に包摂される思惟構造が、神の語る言を聴く人間の側の魂の在り方を規定していくという思惟コンテクストに従って、「聞」の成就が「離脱の教説」へと展開されていくことを跡づける。そして3)では、エックハルトの「祈り」の理解を論ずる。自己の能力や力の断念、よき行為や修練の放棄を意味する「完黙」をも越えた彼方、祈りを捧げる者、捧げられる者という結構が揆無された彼方でこそ祈りは成就するという「一(unum)」の現前においてとらえられているのを見る。

以下このunumの観点を全面に打ち出したエックハルトの「御言論」に解釈を加えていく。(註文)

「IV generatio(註文)をめぐる思惟」では、エックハルト・ミユステイクにおける中心的救済メッセージとなっている「魂の内における神の誕生」についてが主たる論究テーマとなる。

まずエックハルトの受肉理解を探る。そこから、イエスの取ったのはpersona humanaではなくnatura humana、すなわち全人間に共通した一なる人間性(人性)であると理解していることが明らかとなる。ここで「カルケドン信経」で語られているHypostatische Unionについて考察したあと、①全人間に開かれた救済の基礎づけとしてイエスの受肉を理解するという観点、と②救済の現実的成就への道、とがエックハルトのテキストに沿って考察される。

causa univoca Theorie(一義的原因論)の構造においては、生み出す者と生み出される者、すなわち範型(exemplar)と似像(imago)とがいかなる関係のもとでとらえられているかを論ずる。そしてこのcausa univoca Theorie

のパスベクティヴのもとに置かれた子の誕生が、義と義なる者との関係について詳細に論じられている『ヨハネによる福音書註解』をテキストとして、「魂の内における神の誕生」論がいかなる構造を有しているかを論ずる。

そして「IV generatio^(誕生)をめぐる思惟」の最後に離脱と神性の問題を扱い、神をも突破したところに魂の真の安平と自由とがあると語るエックハルトの「離脱論」をその徹底した思惟の深化と展開のプロセスの中で理解することを試みる。

「V 救済論的unumの通景」においては、エックハルトのesse·creatio·generatioトリアーデ構造を真に生ける救済論として賦活する原理となつていく概念をめぐる考察がなされる。

エックハルトの思索全体にわたって救済の原理として働いている概念、それはunum(一なるもの)あるいはunitas(一性)という概念であり、その思想的源泉、通時的概念経歴の淵源はまぎれもなくノイブラトンのhenの概念である。ここでははじめにエックハルトでは直接引用されることがなかったにもかかわらず、プロクロスを通じて明らかにその影響の跡がみられるプロティノスのHenologie(根源一者論)の考察から出発する。このunum(一なる者)という概念は、エックハルトにおいては神論と結びついていく。ただひとりの神、唯一の神とはエックハルトにとって一なる神としてunumと結びつけられて思惟されていくのである。

エックハルトのこのunum神論は、その著作の各箇所でも二つのバリエーションの展開の下で論じられていることが確認される。

それらをまとめて、unum神論における三つのアспектとして以下、Henologieからキリスト教的Theologieへの道筋を追っていく。

このテーマにおいてはエックハルトのミユステイクの思弁的性格が極めて顕著に認められる。

三つのアспектとは、①unumであり限りのunumの観点、②indistinctum(区別なきもの)としてのunumの観点、③negatio negationis(否定の否定)としてのunumの観点であり①の観点は、否定神学の伝統に立つて語られる場合の一なる神の絶対超越的無関係性を全面に打ち出した神論の観点である。

②のindistinctumとunumとの同定の観点は①の絶対超越的孤絶の観点から一転して、神の世界に働く現実的な力を説明する観点となる。区別なきものという概念は、その概念自体に区別あるものの否定という関係を含んでいる

からである。区別なきものは、区別あるものから区別されている。という、区別なきものの有する区別性が語られる一方で、区別なきものの本質である無区別性は、一切のものに対する区別を否定するゆえに区別なきものであるという方向からも他方語られてくる。

この観点が神と被造物に対して用いられたとき、区別なきもの神と区別あるもの被造物とは、最も区別あるものであると同時に、神の側から区別なきものとされてくるのである。この後件は、アナロジア論でみたように、被造物のエッセは神より貸しわたされた神帰属のエッセであり、それゆえただ神のエッセのみあるとする理解と照応するものである。

この後、本論では、区別性と無区別性との相互関係を説くエックハルトのテキストを解釈し、そこから三・一神論への通路を見い出し、エックハルトの三位のペルソナの区別性と神性の一性(無区別性)との関係を説くテキスト解釈へと進んでいくことになる。

V)においては、他者の否定を介して自己同一が成立している被造物としての人間の在り方が「第一の否定性」の意味であり、その否定性のトータルな否定が神であるという「否定の否定」神論を考察し、そこから、この第二の否定が、被造物としての人間の自己否定的あり方、すなわち離脱を語るものであることを論ずる。

本論最後の章立てである「VI 思惟とメタファー」ではエックハルトの用いている数あるメタファーの中から代表的な、しかも重要な意味を担っている二つのメタファーを取り出し、伝統的思惟の系譜や、メタファー自身の通時的意味内実をできるだけ明確に跡づけた上で、エックハルトのメタファーの有する意味を探ろうとするものである。

1) 闇のメタファー：「光と闇の形而上学」においては、同じ概念がラテン語で語られた場合とドイツ語で語られた場合とではその意味内実を担わされるメタファーにどんな違いが出てくるかを、esseとwesenという二語の文脈を追うことによって、明らかにしようと試みるものである。結果は、光と闇という相反するメタファーへと逢着し、そこには、エックハルトにおけるラテン語著作とドイツ語著作との異なる質が語り出されていると考えられるという論旨である。

2) 荒野のメタファー：「救済のトポロジー」では、旧約と新約に登場する「荒ら野」が有する意味の分析と、周縁(liminality)としての荒ら野の意味構造

の解釈を通じて、エックハルトの「荒ら野神論」を聖書的風土のパースペクティヴのもとで再解釈しようと試みるものである。